

## 卷頭言

加藤 信朗

人類はいまや全地表 (orbis terrarum) を一つのものとする地球化時代を迎えている。人類には二十一世紀をそのような時代として生きる知恵が求められている。そして、キリスト教は、いま、新しい地球化時代を生きる全人類の宗教として変成してゆくことが求められている。

この時にあたり、古代地中海世界のなかでキリスト教が一つの宗教として形をととのえるに至った原点に立ちかえり、その理念的支柱となった教父の神学・哲学の歩みをわたしたちアジア人の目と心で学び、究めることは極めて大切なことと考える。それはイエス・キリストの使信がアジアの伝統生命のなかでどのような光となり、どのような生命を与えうるかを明らかにするだろう。また、ヨーロッパ史のなかで生まれ、ヨーロッパ史とともに展開してきたキリスト教に、いまヨーロッパの枠組を越え、全地表の国民

の普遍的宗教となる場が何処にあるかを示すだろう。なぜなら、古代キリスト教会は古代地中海世界のなかで生まれ、古代地中海世界に培われつつ形成されたが、この過程を再検討することは、キリスト教がその後ヨーロッパ史の運命と共に辿った転変を越えて、その最初の生命を新しい地球化世界のなかで生かしうる途を教えるからである。

教父研究会はこれまで十八年間、年四回の研究会を開き、教父の神学・哲学、また、教父から発する問題の諸相の研究に努めてきた。本誌はこの研究会の発表、および、討論の記録を公けにし、志を同じくするひとびとに供し、また、一般の批判にゆだねようとするものである。

本誌の刊行が現代における神学の可能性を模索し、ひろく創造的な思索を開拓する一助となれば幸である。